FDガイド第19号

ベストティーチャーに聴く 授業の工夫②

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行／2020年3月】

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
健康科学専攻　社会･行動医学講座　法医学分野
教授　林　敬人

1 学生飽きさせない授業

私は「学生に飽きさせない授業」を目指して，授業の導入部，中盤，終盤にそれぞれ以下のような工夫を凝らしています。

2 導入部における工夫　ー最初の10分間が肝心

授業の導入部では，最初の10分間に特にエネルギー投入し，「本日はどのような内容の授業が展開されるのか？是非聞いてみたい！」という学生の積極的な聴講態度を作り上げるように努力しています。そのための工夫として，最初の授業スライド（題名ページの次）は必ず，授業内容を象徴し，かつ学生が何らかのリアクションをとることができる質問を投げかけるものにしています。スライドを提示した後に考える時間を少し長め（5～10分間）に確保することで，学生の学習意欲を高めるとともに，教室の雰囲気を温めるようにしています。これによって，授業中でも学生が積極的に質問しやすい環境を作り上げ，自然と「双方向型対話型授業」につながっていると思います。「双方向型対話型授業」は，講師が学生に一方的に話し続ける「一方向型授業」と比較して，学生が主体的に講義に臨むことを可能にし，また，学生ー教員間でコミュニケーションを図ることができるため，結果として学生は講義に飽きない上に，内容の理解が高まることにもつながっていると考えています。

3 中盤における工夫　ー時には脱線することも肝心

中盤には，授業に飽きて眠たくなる学生が少なからず出てきます。授業途中に学生を眠らせないための工夫としては，不定期に質問したり（指名方法はランダムに），図やパワーポイントのアニメーション機能や動画を使用し，視覚に訴えかけたりして学生に刺激を与えるようにしています。また，法医学に限らず医学部の授業は全体的に暗記事項が多いのですが，スライドに単に名称を提示するだけではなく，その背景にある基礎病態（解剖生理）も同時に提示することで，学生が理解を伴った形で記憶できるように心掛けています。さらに，カリキュラムに沿った内容以外にも，法医学領域の最新の知見を提供し，学生の学問的好奇心を刺激することで，授業後も自主的に学習する意欲を掻き立てることにつながると思います。時には授業以外の内容に脱線することも，講師にとって必要なスキルだと思います。

4 終盤における工夫　ー最後まで気を抜かない

終盤には，授業内容に関する問題を用意し，時間をとって考えさせた後に，数名に発表させます。その後，説明しながら答え合わせをすることで，授業内容の理解度を最終的に確認することもできます。また，授業後に予定されている法医解剖や死体検案の告知をすることで，見学を促し，授業後も自主的に法医学を学ぶ環境を提供しています。実際に見学に来た学生には，その日の授業で教えた内容を直に経験してもらうことで知識の定着にもつながると思います。授業の最初から最後まで学生が授業内容を理解するために，あらゆる工夫を凝らすことが大事であると思います。

5 最後に

以上のような工夫を凝らしていますが，授業全体を通して，学生に楽しみながら，興味を持って受講してもらうことで最も教育効果が得られると考えています。そのために最も大事なことは，講師自身が楽しそうに授業を行うことであり，私自身は常に心掛けています。今後もベストティーチャー賞に恥じぬように，教育法について絶えまぬ努力と工夫を重ねて参りたいと思います。

FDガイド第19号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫

鹿児島大学 学術研究院 法文教育学域 教育学系
准教授　高谷哲也

1 「よい授業」に唯一の解はない

授業という営みは、文脈依存性が高く、さまざまな要素の相互作用によって成立する営みです。そのため、「よい授業」を一律に定義することはできません。たとえば、何を「よい」とするかは、その科目が扱う内容やカリキュラム上の位置づけによって異なるでしょうし、何を「よい」と感じるかは、学習者の属性や関心によって異なるのが現実でしょう。つまり、「よい授業」に唯一の解はなく、その時その瞬間の条件にあわせて「その時ならではのよさ」をその都度追究することが、「よい授業」追究の本質だと考えられます。

そのように考えると、「よい授業」について固定的なイメージを持つことはむしろ危険であり、常にその時の条件下では何が「よい」のかを問い、開発・探究し続けることのできる柔軟な思考こそが重要だと思います。本記事において紹介する私の実践も、その意味では私と学生の間の特定の条件のもとで成立を目指し日々試行錯誤している方向性のようなものとして捉えてもらえればと思います。

2 「教える」のではなく「自分たちでつかむ」学習をデザインしファシリテートする

私が追究している授業デザインの核心は、「学生自身が授業の主役となる」ことです。教えるのではなく、学生が自分たちでつかむことのできる授業となるよう、個々の学生による作業、少人数グループでの協同、教室全体での対話や追究など、様々な学習形態を駆使します。それは、受講者が100名をこえる大人数講義においても変わりません。私が説明するパートにおいても、受動的に聴くだけにならないよう、話の展開の中で問いを投げかけ続けるなど、学生が問いを持ち思考しながら聴くことができるよう工夫しています。学生たち自身で学習を進めていく際には、写真のように問いや作業手順を板書し可視化します。グループでの協同では、一人ひとりの学生の積極的な参加のしやすさや学習効果の面から、1グループ4名以下を基本としています。そのため、大人数講義ではグループの数が30～50になることもあります。

受講者が30名より少ない授業のいくつかでは、学生自身に輪番制で授業者となってもらい、自分たちの学びを自分たちで創ってもらいます。それは、レジュメを作成して報告するというレベルではなく、実際に90分の授業を創るというレベルで取り組んでもらいます。自分も初めて学ぶ内容を、他の受講者と共に考え理解していく時間を実現するために、どんな問いを設定しどのような学習形態で追究していくかを学生は考えデザインします。私は授業デザインを共に考え、授業当日は最低限のサポートに徹します。そのような取り組みを続けていると、学生は写真のように、固定的な授業スタイルを越えて自分たちの学びを深めるための様々な工夫を自分で考え挑戦するようになります。

3 自分が誰よりも授業とことばを大切にする

私は、教師が大切にしない授業を学生が大切にすることはあり得ないと思っています。授業において教師は学習者にメッセージを届けるメディアだと表現されます。学習者は教師からの言葉以外にも、様々なメッセージを受け取っています。5 分前には教室に入り、黒板や教具を整え、時間通りに授業を始め、時間通りに終えます。会議など何らかの理由で授業開始時刻に遅れた際には、どんなに短い時間の遅刻でも理由を説明し謝罪します。終わり時間を越えそうな場合も同様です。謝罪し許可を得て次回以降超過分を返済することを伝えます。遅刻してきたにも関わらず理由も述べず平然と授業を開始されたり、平気で授業時間を延長されたりする中では、本当の意味での「この先生の授業を大切にしよう」という学生の気持ちは醸成されないと思うからです。

また、学生が主役となり大切に思える授業を実現するためには、「学びに没頭し楽しむ」時間を提供することが最も重要だと考えています。そのために私自身がまず授業を誰よりも楽しみ、学生の楽しみを妨げることばの使用と「学生に～させる」という発想を禁止しました。具体的には、「注意・叱責・命令や威圧感を与えることばを使用しない」、「感謝・御礼・依頼・肯定のことばを充実させる」など、授業中に自分の発することばに細心の注意を払っています。その結果、大人数講義においてもしっかり学んでもらえ、この 10 年間、本当に叱る必要のある場面は数回でした。「講義内容をはじめ、先生の言葉遣いや話し方聞き方など、たくさん学びがあった」との感想も学生から寄せられるようになりました。

すべての配付資料はサイズを統一し、大切にファイリングできるようにパンチ穴を空けています。配付物は一人ひとりまたは列ごとに手渡しで配付してまわるか、グループごとの封筒に丁寧に入れて配付します。「私からあなたに渡す大切なもの」だからです。そのような細部の基本的な姿から学生は「授業に対する教師の本気度」を感じ取ると思うからです。私の方からファイルに綴じておく旨の指示をしたことはありませんが、多くの学生が丁寧にファイリングしてくれています。

最後に、「不利な条件を言い訳にしない」ルールを自らに課しています。たとえば、100 名を越える受講者数や固定の机や椅子が一般的な大講義室は、グループ学習にとって不利な条件です。しかし、教師側の工夫次第で十分に成立することをこれまでの学生たちは証明してきてくれました。不利な条件を言い訳にするのではなく、そのような条件のもとでも学生の学びの深まりにとって大切な学習を実現するべく挑戦する教師の姿が先にあるからこそ、学生も授業を大切にするようになっていってくれることを教えられました。

【鹿児島大学FD委員会FDガイドWG】
帆保　誠二(共同獣医学部)　米田　憲市(法文学部)　牧迫　飛雄馬(医学部)　甲斐　敬美(工学部)